

〈読み〉と〈作者〉

桑原 正紀

今年になって読んだ歌集の中で、こころ惹かれたものはいくつかあるが、永田紅さんの『いま二センチ』もそのひとつだ。

親指と人差し指のあいだにて「いま二センチ」の空気を挟む

母あらば胡瓜とワカメの酢の物をガラスの器に作りてくれむ

たった一人のお祖父ちゃんとなる我が父がお祖父ちゃんらしく眼鏡ずらしぬ

妊娠・出産・子育てという人生初の大仕事を中心にした歌集で、仕事への復帰も絡んでの奮闘ぶりが時間軸に沿って展開されている。

ところで、言うまでもないが、作者の永田紅さんは永田和宏・河野裕子夫妻の娘さんである。私たち読者は、これらの歌に登場する「母」や「父（お祖父ちゃん）」という普通名詞を、「河野裕子」「永田和宏」という固有名詞に置

き換えて〈読む〉こととなる。そのことよって、これらの歌がひと味もふた味も違ってくる。「蟬はどこで鳴いていたのか薄明に母とその母が聞きしとう蟬」という分婉時の歌もあるが、読者の多くはすぐに、河野裕子の「しんしんとひとすぢ続く蟬のこゑ産みたる後の薄明に聴こゆ」という歌を想起するだろう。

このように、短歌の読みには〈誰の作か〉ということが大きく関わってくることもある。それが否応なしに絡んできて読みを限定する場合もあれば、作者を知って歌のよさが理解できる場合もある。

先日もある歌会で次のような歌に出会った。

声域の狭まるやうに制限をかけてきてみた 赤を着ようか

もちろん無記名であって、私はコロナ禍が落ち着いてきた今の背景を想定した読みをして、結句の飛躍が落ち着きがよくないと評したのだが、作者を知る方から、狭い地域社会の中で逼塞した生き方をしてきた作者を想定した読みができることを指摘され、なるほどと深く納得した。そう読めば結句が急に生きてくるのだ。

短歌の読みは三十一音の中の情報が第一という前提は揺るがないにしても、ときにその外の情報、とりわけ作者という生みの親の具体像が読みを助けたり、豊かにしてくれることがあるのは確かなことのようにだ。